

Changing the World
Begins with Imagination

想像する
ことで世界は
変わっていく。

医療機関向け

性的マイノリティ
サポート
ハンドブック



熊本市



最近よく聞くLGBTって どんな人たちのこと？

性別は“男性はこう”“女性はこう”と単純に2通りに分けられるものではなく、しぐさや言葉づかい、好きになる性別などにおいて、「性のあり方」は人の数だけバリエーションがあります。「異性を好きになるのが普通」「生まれた時の性別に合わせて生きるのが当たり前」という考えではなく、それぞれの人にとっての「自然なあり様」を認め合うことが大切です。近年ようやく社会に知られてきたLGBTという言葉は、下記それぞれの頭文字をとった言葉で、性的マイノリティ(性的少数者)を表す言葉の一つとして使われることもあります。

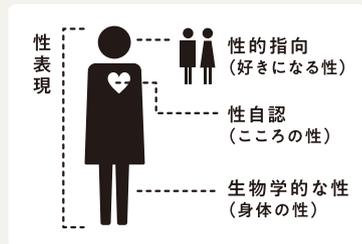
性的指向 好きになる相手の性別		性自認 自分の性別の捉え方	
L	G	B	T
LESBIAN レズビアン	GAY ゲイ	BISEXUAL バイセクシュアル	TRANSGENDER トランスジェンダー
女性として 同性に恋愛感情や 性的魅力を感じる人	男性として 同性に恋愛感情や 性的魅力を感じる人	異性と同性に恋愛感情や 性的魅力を感じる人	出生時に割り当てられた性別と 異なる性別を生きる人 (性同一性障害者を含む)

「性のあり方」は人それぞれ。

性的指向とは、どのような性別の人を好きになるかということで、性自認(性の自己認識)は、自分の性をどのように認識しているかということ。性的マイノリティは、LGBT以外にも、男女どちらにも恋愛感情を抱かない人や、自分自身の性を決められない人、わからない人などさまざまな人々がいます。



性を構成する要素を知ろう



性別と聞くと身体の性をイメージする人が多いかもしれませんが、一人ひとりが持っている性は、左記の要素が組み合わさっています。個人の性は、それぞれが持つ「個性」。他者が決めつけるものではありません。あなた自身の性についても考えてみても良いかもしれませんね。

違いを知って「個性」を受け入れよう

私の性自認は <input type="text"/>	私の性表現は <input type="text"/>
私の身体的性は <input type="text"/>	私の性的指向は <input type="text"/>

異性・あるいは同性を好きになる人、どちらの性も好きになる人、誰かを好きにならない人。自分のことを男性だと思う人、女性だと思う人。どちらの性別にも決められたくない人…。多様な「性のあり方」を知り、その個性や生き方を尊重しあうことが重要です。



「言えない」から「見えない」ということ。

「性的マイノリティの人に出会ったことがない」「これまで身近にいなかった」という声を聞くことがあります。なぜ、出会わないと思うのでしょうか。それは、今の社会では「自分の性のあり様」を示すのはハードルが高いことだからです。性のあり様は必ずしも目に見えるものではなく、「言えない」から「見えない」のです。「本当のことを伝えたら嫌われるのではないか」「バレたらいじめられるかもしれない」…。そんな悩みを抱え、本当の自分を隠して生きている人がいるかもしれないと想像することが大事です。

少年期～青年期

いじめのリスク

- 「男・女らしくない」「気持ち悪い」などのからかいやいじめを経験することがある

自分探し、仲間探しが困難

- 家庭や学校で孤立しやすい
- 悩みや不安の解決に役立つ適切な情報にたどり着けない

青年期～中年期

就職困難、職場での差別

- 見た目と履歴書の性別が異なることなどを理由に、採用されないのではないかと不安になったり、中には採用差別も
- 採用後も、職場でのいじめ、からかい、昇進差別などのハラスメントを受けることがある

もしもの時の法的保障がないかもしれない

- 同性同士で結婚できず社会保障がない
- 入院時に家族として扱われない場合もある

受け入れ体制がなくDVの発見や支援が困難

- 同性間でもDVは起こっている
- 相談のできる環境がまだまだ不十分ため相談ができないまま深刻化しがち

中年期～高年期

自身の老後に対する不安

- ロールモデルが少ない
- パートナーとの法的な保障がなく不安



COLUMN 世界・地域の現状

世界には、同性婚やパートナーシップ法が存在する国、同性愛を犯罪とみなす国、特に法制度が存在しない国とそれぞれです。世界で初めて同性婚が実現したのはオランダですが(2001年)、その後、ヨーロッパ諸国、南米、アメリカ合衆国と、同性婚が法制化される国・地域は広がりを見せています。ちなみにアジアで初めて同性婚が可能になったのは台湾でした(2017年)。

日本では、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会が「持続可能性に配慮した調達コード」を発表(2017年)。これは大会開催に関わる企業に対して、組織委員会が遵守を求めているガイドラインで、性的指向・性自認に関する差別禁止が盛り込まれました。また、同性婚が法制化されているスウェーデンとノルウェーは、事前合宿地として九州で初めて「パートナーシップ宣誓制度」を導入した福岡県を選びました。



熊本市でも2019年4月に「パートナーシップ宣誓制度」をスタートし、同年8月に初めて制度が利用されました。

※パートナーシップ宣誓制度とは一方、または双方が性的マイノリティである2人の関係を尊重するための制度。



TAKE ACTION

多様性とは多様な個性。 いま、目の前にいる人の 背景を想像する。

「多様性を受け入れる社会」とはどのようなものなのでしょう。なんとなく、言葉だけが先行して、イメージが共有できていないように感じませんか？ 多様性とは、マジョリティとマイノリティの人がいるという意識ではなく、「特別な人」のためにあるものではありません。その人の生き方や、こう生きていきたいと願っている考え方を、自分とは違う個性として認めて生きていくことではないかと思います。私たちは、顔も、性格も、話し方も、クセも、一人ひとり違う。つまり、誰しもが多様な個性を持っているということです。家族や職場の同僚、友人、先輩・後輩、お隣さん。いま、あなたの目の前にいる誰かが、自分の知らない世界を生きていること。ここに来るまでに重ねてきた人生の背景を、少しだけ想像してみること。それはなにげなく、ささいなことに見えますが、その世界は、きつとどこかであなたとつながっています。

今よりもっとよくするために。

不用意な発言や行動によって、誰かを傷つけてしまうのは残念ですよね。ふだん何気なく使っている言葉が、相手にどう伝わる可能性があるかを想像することが大切です。性的マイノリティの人に限らず、人と人とのコミュニケーションが前提にあるということを忘れないことが大事です。

こんな言葉を使ったり、 聞いたりしたことはありませんか？

- あの人って、男なの？ 女なの？
- いつまでも結婚しないけど、そっち系なの？
- ここには同性愛者の人とかいないよね？
- レズとかホモとか、生理的に無理
- 同性同士でどうやってセックスをしているの？
- 下(性器)はどうなっているの？

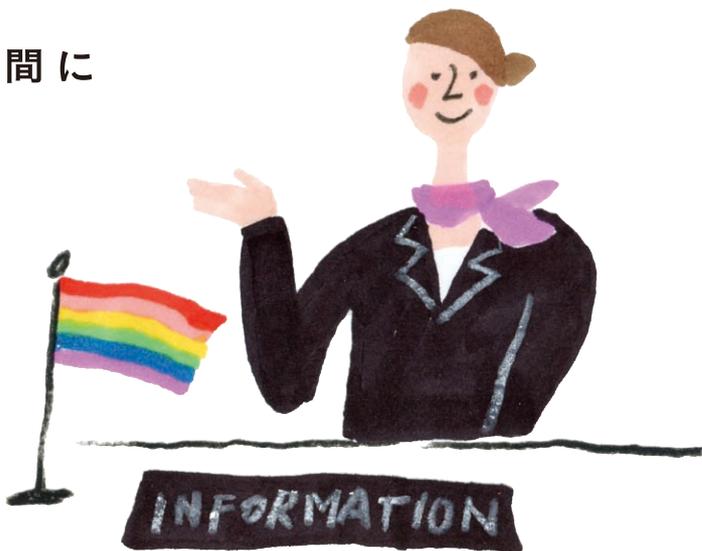


（ 今よりもっとよくするための5つのアクション ）

TAKE
ACTION

1 あなたと世界のために 虹をかけよう。

赤、オレンジ、黄、緑、青、紫の6色からなる“レインボーフラッグ”。これはアメリカで生まれた性的マイノリティのシンボルですが、性の多様性を尊重する意思や連帯を表現するものとして、日本でもよく使用されるようになりました。たとえば入り口や受付、レジなどお客さまの目につくところに設置することで、歓迎の気持ちを示すことができます。時間もお金もかからない小さなアクションですが、「店にフラッグが置いてあるだけでホッと安心する」「泣きそうになるくらい嬉しかった」といった声も上がるほど、歓迎のメッセージが伝わります。



EPISODE

今では、病院や店舗、公共機関などさまざまな場所でフラッグやステッカーが見られます。フラッグを掲げている場所が増えることで、より多くの人が気持ちよく過ごすことのできる対応やサービスにつながっていきます。もちろん、スタッフ全員の正しい理解に向けた教育も大切です。

TAKE
ACTION

2 みんなにやさしい、 「だれでもトイレ」。

日常生活のなかで不便に感じる場所や場面はさまざまですが、特にトランスジェンダーの方が悩みやストレスを抱えやすい施設はトイレだといわれています。トイレは毎日使う場所で、本人にとっては切実な問題。おもな困りごととしては「トイレに入る際に周囲からの視線が気になる」「注意や指摘を受ける」「男女別のトイレしかなく選択に困る」などがあり、その解決策の一つとして、性別に限らず誰でも利用できる「だれでもトイレ」の確保があります。このトイレを誰でも心地よく使ってもらえるように、入口に「だれでもトイレ」と表示すると良いでしょう。

EPISODE

特にトランスジェンダーの女性のトイレ問題は深刻です。外出先で緊張感を強いられたり、災害時に直面する課題としても挙げられたりしています。



TAKE
ACTION

3

アウトティングは絶対にしない。

性的マイノリティであることで、日常生活のなかでさまざまな「暮らしにくさ」や「生きにくさ」を抱えている人がいます。そのような状況で、セルフケアできない傷病にかかり、医療機関へ行かなければならないことがあります。ところが、その方たちは医療機関にかかりにくいといわれます。その原因の一つが、医療機関に勤務する職員による意図的ではない「アウトティング」です。アウトティングとは、当事者の了解を得ずに性的指向・性自認を暴露することで、特に戸籍上（保険証）の性別と外見が著しく異なる場合、受付で大きな声で何度も本人確認をしたり、フルネームで呼び出すこと、他の方々の目の前で患者のジェンダーについて説明を求めることはアウトティングになりかねません。このことを恐れて受診をためらう方が多くいます。本当に治療が必要な方が受診できない、健康診断に行かない…といった負の連鎖が起こってしまうのです。

EPISODE

医療従事者が性的マイノリティの正確な知識を理解した上で、トランスジェンダーに限らず「名前ではなく番号で呼ぶ」などの配慮を行いましょう。本人確認をする場合も、声のボリュームや確認する言葉の内容なども十分に注意が必要です。



TAKE
ACTION

4

本人とその家族（パートナー）に寄り添う。

医師だけでなくすべての医療従事者は、診療の補助や、患者と家族（パートナー）の身体的・心理的ケアを行う重要な役割を担っています。また、事務職員も、受付から診察、会計（薬）までのスムーズな流れを実現するための大事なポジションです。当事者が心身ともに苦痛をかかえ、医療機関に行った際に、理解のある対応をされたらどれだけ心強いでしょうか。呼び名、氏名の表示（ベッドネーム・ルームネーム）や入浴時の配慮、法的な家族ではないパートナーがいる場合の対処など、気をつけたいポイントは一人ひとりのセクシュアリティの特徴やその背景によって違います。大事なのは、本人の意向を確認し、その医療機関としてできること、できないことを話し合い、しっかり寄り添うことです。

EPISODE

本人にとって、自身を理解してくれるパートナーはかけがえのない存在。「血縁関係がないから」「家族間でトラブルになる」などの理由でパートナーを面会させないのは、患者にとって苦痛や不安を増長させてしまう原因に。



TAKE
ACTION

5

どんな些細なことでも確認を。

LGBTという言葉がメディアで取り上げられるようになり、少しずつ社会に知られてきましたが、初めから理解のある対応をすることは難しいかもしれません。しかしながら、知識が全くないままでは信頼関係の構築は困難でしょう。患者や家族（パートナー）の思い、何を求めているのか、どんな医療ケアを望むのか。「特別扱い」を望んでるわけではありません。小さなことでも、一つひとつ確認していくことが望ましいです。日々のケアの延長線上で、お互いに信頼関係を築きながら素直なコミュニケーションをとるようにしましょう。

EPISODE

医師を含め医療機関に勤務するすべての職員やチームで正しい知識を共有するために、医療機関ごとに定期的に研修を行うことが望ましいでしょう。その医療機関でできることを、みんなで考え続けることが大切です。



OTHER TAKE ACTION

医療機関従事職員

として、

「その人らしく生きる」

を支える。

問診票・ 情報管理について

トランスジェンダー患者を中心に、「男・女」と2つに性別を分けられることに苦痛を感じる人もいます。性別欄に()などフレキシブルに書き込める欄をつくったり、院内での情報管理は細心の注意を払いましょう。仮にトランスジェンダーではないかと感じる場面があったとしても、直接尋ねるのは控えましょう。他人が誘導することは、強い混乱をまねかかねません。

院内ルール・ 対応マニュアルづくりを

「相談なく戸籍上の性別で、病衣・トイレ・浴室を案内された」「相談なく望む性別ではない大部屋を案内された」など、適切なコミュニケーションが不足したために、不快を感じるトランスジェンダー患者は多くいます。医療安全をふまえたなかで、できる限りの対応を考えていきましょう。

決して患者だけじゃない

患者やパートナーに性的マイノリティの人がいるように、医療機関に従事する仲間にも必ずいることを想定しておきましょう。同じ医療を提供している仲間として、その身体面・精神面を理解して思いに寄り添っていくことも大事です。



**Changing the World
Begins with Imagination**

世界には多様な愛の形、
それぞれの性のあり方があること。
私にとっては非日常でも、
それを日常として生きている人がいること。
あなたがこれからも自然でいること、
当たり前でいることができる
世の中の方が、健全だと思う。
想像すること。
そこから、世界はもっとよくなる。

制作／熊本市
取材協力・監修／
ともに拓くLGBTQ+の会くまもと、
くまにじ(5～6ページを除く)

